

2 平仮名指導の導入期について

滋賀大学教授

中村史朗

1960年京都府生まれ。専門は書学書道史。漢字を中心とする書家としても活躍。光村図書 中学校「書写」および高等学校「書」教科書編集委員。



今回は、楷書という書体の基本的な性格について説明しました。今回は、導入期の書写指導を実践するうえで、楷書と平仮名をどのように把握すればよいかについて考えます。

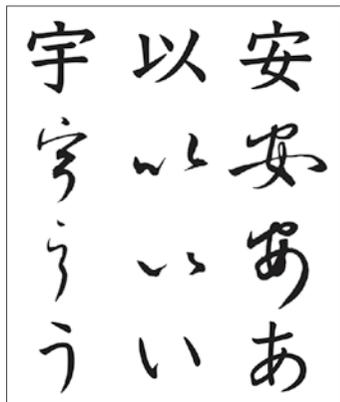
1 導入期の指導と楷書

小学校一年生において、児童は初めて「表記すること」を学びます。具体的には硬筆で平仮名を書くことがその始まりになります。教科書には規範となる平仮名の姿が示され、いくつかの原則にしたがってそれらを習います。これらは学習用に考案された楷書としての平仮名です。児童は、繰り返えし練習し、反射的に書けるようになっていくのですが、定着には相当な時間が必要です。これは、漢字の楷書を書くことと少し勝手が違うことが関係していると思われまます。どうい

ところが異なるのか、具体的にみていきましょう。

2 仮名の本来の性格

仮名は漢字をもとにしてできたことは言うまでもありません。現在の平仮名は漢字の草書という書体を原型としています。草書が時間をかけて簡略化され、今日の平仮名の姿になりました(※1)。それは文字どうしを結びつけ、複数の仮名が一体化して語や語句を作りやすくするためだと考えられます。本来、平仮名は場合にに応じて形が変化し、次の文字に連続しやすい姿をしています(※2)。点画



※1 小学校「書写」6年 p21



※2 高等学校「書I」p81

3 楷書としての平仮名

いっぽうで、小学校で習う平仮名は、仮名本来の性質をいったんはリセットして、漢字の楷書に合わせてデザインし直されたものです。各文字の指導事項については経験上熟知されている方が多いと思いますが、ここでは楷書としての平仮名という視点を基本にして、草書としての要素がどこに生かされているのかを踏まえながら、少し別の角度から書き方を整理してみましよう。

① 一画の独立

前号で解説した、楷書の「三節」の運筆リズムは、平仮名や片仮名にも生かされています。もともと一筆で書かれていた平仮名はさまざまな点画に分節し、一画ごとに「始筆→送筆→終筆(とまると、はらう)」という運筆でつくられます。例えば「あ」なら三画、「た」は四画、「ね」は二画という具合です。ただ、それぞれの点画は漢字のような基本点画から成り立っているわけではないので、一字ごと

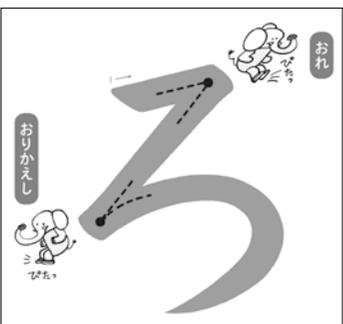
② 曲線的な要素

平仮名が平仮名らしい姿で書かれるた

めには、草書に由来する曲線要素を的確に書くことが大切です。「つ」「や」「め」などの「まがり」の要素が最も顕著なものでしょう。児童の手にとっては大きな動作になります。右下方からはらうところまでをじっくり書くように指導したいものです。また、「い」「こ」「に」などを構成する点画の微妙な曲がり具合にも十分注意して、毛筆の弾力感への想像力を育みたいものです。

③ 「おれ」「おしかえし」など

「ゆ」「れ」「ろ」「ん」などに見られる「おれ」「おしかえし」の要素は草書が平仮名になる過程でも失われなかったもので、文字の骨格を支えるものです。「おしかえし」は毛筆の穂先が反転する感覚に対応しています(※3)。



※3 小学校「書写」1年 p13

④ 筆脈を意識して書く

低学年における筆順指導は重要なもの

ですが、平仮名の場合、特に筆脈を意識して書くことと一体的に指導することが重要です。連続する運動が各文字の姿を形づくります。繰り返し書く中で、実際に点画が連続していない空間の動作が定着するように心がけたいものです。

4 平仮名に習熟する

導入期の児童に対して、一字ごとの特徴を踏まえて丁寧に指導することは欠かせません。また、日常に定着するようにもなっても、導入時のことを再度学習して到達を高めていくことも必要でしょう。この時期のめあてとして、楷書としての平仮名の書き方を知り、漢字と調和する姿を学び、日常の表記に生かす、ということがあるのですが、いっぽうで筆者は、平仮名は漢字とは仕組みが違うものである、という実感を書きながら得ることも重要であると考えています。それは高学年になって、「仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること」といった指導事項に連動し、中・高等学校の学びにも結びつくことだからです。多角的な視点を持って平仮名の習熟を支援することを心がけたいものです。